



凶鑑ちゃん、夢夢。

そういうのは窓辺に置こう。

うん。そうだ。

いや、どこに置くのが正解というのはないんだけど。少なくともこれは点滴と並べて吊るしておくような物じゃない。ベッドの下……戸棚の……うーん、どうだろう。

やっぱり窓辺がいいんじゃないか。日も当たるし。

しかしひさしぶりだね。一ヶ月ぶりかな。

調子はどうだい。日に日に快復しつつあるってね。良かった良かった。これ、フルーツ盛り合わせと今週分のプリント。家庭訪問のお知らせもあるからちゃんとお母さんにも渡すんだよ。

……さてと、何から話そうかな。

きみがきつと退屈しているだろうと思って、たくさん考えてきたんだが、こうしていざ話そうって時になると何から切り出していいものか迷ってしまうな。

よし、三浦だ。三浦のことは知っているだろう。バスケット部の。

その三浦が、きみの事をひどく心配していたよ。放課後にわざわざ職員室に来て、聞いてくるんだ。凶鑑ちゃんの体調はどうですかって。

ずいぶん学校休んじゃっているからね……。いや、勿論たいした病気じゃないんだけど、万全を期す、っていうのかな。治ってもすぐに再発しないように、検査がいろいろあるらしいんだよ。

これぜんぶ、きみのお母さんから聞いたんだけどね。

いやいや、そんな不安な顔しないでくれ。たのむよ。

そうだ、その三浦だ。背が高くて、まぶたのところに火傷のある。いま思い出したのかい。そうそう、「フランケン」だ。

そのフランケンこと三浦がね、きみのために鶴を折っているらしいよ。千羽鶴、わかるかい。凶鑑ちゃんの病気が治るようになって願いをこめて、折り紙でつくるんだ。三浦はクラスのみんなにはもちろん、先生たちや他の学年の生徒にも呼びかけて折ってもらっているらしい。

もしかしたら、三浦は凶鑑ちゃんのことが好きなんじゃないのかな。きみ、意外とモテるからね。

あれ、赤くなったね。はずかしいって？ そうか。

本で顔を隠さなくたっていいじゃないか。

それ、何の本？

ああ、聞くまでもなかったね。何の凶鑑？ 動物？ 植物？ 昆虫？

……………あつ！

ついさっき、はい。すいません、勝手に。いえいえ。つい先程、職員会議が終わりました。ええ。すいません、わざわざ。おかまいなく。

あ、はい。家庭訪問の時はまた、よろしく願います。

.....きみはお母さん似なんだね。ほら、いまコーヒーを運んできたとき、横顔がそっくりだったよ。うん。ああ、うれしいかい。

え、先生？ 先生はいたって健康だよ。

顔が、前よりやつれているって？ 目のクマは生まれつきです。

でもたしかに、最近はやっと忙しくてね。もうすぐ二三年生の合同遠足だろう。そのしおりづくりとか、ゲームの企画づくりに奔走する日々だよ。ああ、ほんそうっていうのは、あくせく走り回ってるっていうことで、.....いやいや、本当に走ってるわけじゃなくて、たとえだね。頑張ってるってこと。

.....そうだね、自分で頑張ってるなんて言っちゃいけないよね。

ずっと前のホームルームで、先生が皆に言ったことだっけ？

凶鑑ちゃんは何でもよく憶えているんだな。こわいこわい。

そうだ。先生、健康の秘訣を知ってるんだよ。

教えようか？

コマネチって、わかる？ 凶鑑ちゃん。

ビートたけしのギャグだよ。

そうそう。そういう.....いや、ベッドに立たなくてもいいから.....そう、それぞれ、合ってる。合ってるからさ。ちょっと坐ろうか。看護婦さん来ちゃうから。すごい埃だから。

その.....だね、コマネチをね、毎晩寝るときに鏡の前でやるんだ。

三十回を、三セット。これが案外きつくてさ。汗びっしょり。はじめは太腿の付け根部分が筋肉痛になって大変でさ、でも今はもうだいぶ平気。五から六セットはやれるかな。

試してみる価値はあると思うよ、コマネチ健康法。

先生、部活の顧問やってないからか、運動不足が悩みでね。それに、授業中はずっと立っているわけだ。けっこう体力勝負なところがあるんだよ、この仕事。

.....うん、上手上手。上手なんだけど、騒がしいからね、凶鑑ちゃん、埃も舞うしね、坐ろ。

ああ、首をかしげてね、似てる似てる。

こら、誰がバカヤローだっけ？

そんな汚い言葉を遣うもんじゃない.....ああ、モノマネか。うん、似てるから。坐って。

そうそう、ダンカンね。そう枝豆、らっきよ、義太夫.....よく知ってるね。ああ、お母さんが好きなんだ。たけし軍団。意外だね。ラッシャー、タカ、伴内.....うん、わかったわかった。

ちょっと興奮させちゃったね。もう少し話題を選ぶべきだったな。

ああ、コーヒーもほとんどこぼれちゃって。

はい、これも拾って。床に落ちてるよ、凶鑑凶鑑。手放すなんて珍しいじゃないか。手が滑った？ そうか。

凶鑑ちゃんの宝物なんだね。

学校にも毎日持ってきていたものね。授業中もずっと両腕に抱えているから、いちど叱ったことがあったね。うん、ごめんね。泣いちゃったのは、びっくりしたんだよね。先生があんまりいき

なり怒ったから。以後、気をつけます。怒るときは、徐々に、徐々にと心がけます。

でも、それはいったいなニ図鑑なんだい？

動物？ 植物？

どっちも――は、載ってないよね。さすがに。けっこう分厚いから可能性は捨てきれないけど。

……え、載ってる？ 全部、そこに？ はは、まさか。

でも、本当だったらすごいね。そりゃ手放したくなくなるわけだ。

見せて……は、くれないんだね。

はいはい、かまわないよ。取らない取らない、安心して。後ろ手に隠さなくたっていいじゃないか。ああ、ハナが垂れちゃって……

ああ！ お母さん。いらしたんですね。ええ、大丈夫ですよ。ぼくがやります。ただその、テレビの上のティッシュを二枚取ってもらえますか。

はい、チーン。図鑑ちゃんチーン。

最後に勢いつけてもう一回、チーン。

たっぷり出たねえ。すっきりしたかい。ふふ、わかるわかる。チーンしたあとって、なんとなくポーっとしちゃうよね。口から「あー」って息が漏れちゃうくらい。

あ、お母さん。買い物に行かれる？ どうぞ、どうぞ。

今日はぼく、空いているんです。帰って、ええ、来るまで、ええ、ここにいます。そんな、遠慮なさらずに。

……お母さんも大変だよ。きみの看病だけじゃなくて、家のこともやらなきゃいけないから。早く治さないかね。

えっ、仕事かい？ 忙しいよ。教師に暇な日なんてないんだよ。

ああ、さっき。さっきはきみのお母さんが遠慮しないようにと思って言ったんだ。その方がお母さんも気兼ねなく買い物に行けるだろう。

まあ、たしかに嘘っていわれちゃったら反論できないけど。

ヘン？

そうだね、大人ってヘンなんだよ。そうだ。図鑑ちゃんに、先生のお父さんの話をしようか。お母さんが戻ってくるまで。

ああ、図鑑を読む……ああ、そう。

でもさ、そろそろ目が疲れたんじゃない？

疲れてないか。ああ、そう。うん、そんなに広げて見せなくてもいいよ。見ても、疲れてるかなんてわからないでしょ。充血しちゃうよ。

まあいい。じゃあ一人で勝手に話すとしてよう。

先生のお父さんの話だ。

先生と先生のお父さん、実はあまり仲が良くなくてね。先生が東京の大学に出て一人暮らしを始めて以来、別々に暮らしているんだ。地元に戻ってきた今でもね。

昔から物事の「筋」っていうのを、気にする人だった。その父に言わせると、先生が「学校の先生」っていう仕事をしているのは「筋が通っていない」ことらしい。正月とかお盆の時には実家で一緒に夕食をとることもある。でも、泊まっていけとは言わない。家族そろって談笑していても、ふとした拍子に父は人間ぎらいの野良猫みたいな警戒した目を向けるんだ。

で、八十を越えた頃からかな、ぼけてしまってね。いまじゃあろくに話もできない。また、去年に母が膵臓がんで亡くなってから余計にひどくなって。

ただ、話すことはできないんだけど、かろうじて言葉は発することができるんだ。その発し方が実に「ヘン」でね。

あいうえおはよう、かきくけこんにちは。

なんて言うんだよ。

君もやったことはないかい？ 音読する前の発声練習。最初はふざけてるのかと思ったよ。でも、そのうち、

さしすせそーすとってくれ。

なにぬねのどがかわいた。

って、やけに実用的な使い方をはじめた。

どうやら先生の父さんは、五十音各行の末尾からしか、言葉をつむぎだせなくなっただけらしい。昔は日曜礼拝で、聴衆がうっとりするほどなめらかに聖書の一節を朗読していたのに。

そうそう。ソースはね、昔から好きで。サラダはもちろん、焼き魚とかカレーにもソースかけて食べるんだよ。先生のお父さん。

.....聞いてないね。まあどうでもいいよね、こんな話。

ただ、その症状に気づいて、先生は逆にうれしかった。もう二度とまともには喋れないものだと思っていたから。

あいうえおかわり、ごはんを。

まみむめもんでくれ、肩を。

倒置法まで使うようになった。立派なもんだ。

ある日、出張のヘルパーさんが言った。

いよいよ一緒に暮したらどうですかって。

先生は構わなかった。むしろ、ずっとそれを望んでいた。

そうだよ、お父さん。一緒に暮らそうよ。

母の一周忌の日に、そう言った。

お父さんは無視した。と、そこにいた親戚の人たちは思っていたようだけど、先生には聴こえたんだ。すぐ隣りにいたからね。声はこもっていて明瞭には聴きとれなかったけれど、確かに答えた。よくおぼえているよ。こうやって、いつでも暗誦できる。

.....たちつてとにかく、あいうえおまえの、なにぬねのろわれた、はひふへほんとうの姿を、あいうえおれは、さしすせそーすとってくれ、さしすせそうじゃなくて、たちつてとにかく、あいうえおまえは、なにぬねのろわれているんだ、あいうえおれは、あいうえおまえを、かきくけころせなかったから、さしすせそーすとってくれ。

ヘンだろ。こんなにヘンな大人は滅多にいないぞ、凶鑑ちゃん。

ハヒフヘホだなんて、バイキンマンみたいだろ。

あれ、なんか凶鑑ちゃんとドキンちゃんって似てない？

あ、そうか、聞いてないんだったね.....。

先生のお父さんは死んだよ。先月のことだ。お風呂場で溺れちゃってね。ほら、午前中、体育以外ぜんぶ自習になった日があっただろう。その日がお葬式。さしすせ葬式、ね。みんなには先生サボリじゃんって囃し立てられたけどね。

そのときも凶鑑ちゃんだけは、ぼくをじっと見つめていた。

.....凶鑑ちゃん.....あれ、どうしたの？

.....泣いてるの？

どこか痛むのかい？ 看護婦さん呼ぼうか？ 担当の先生、何て言う人だい？ 薬は、薬。それとも、先生の話聞いて.....泣いてくれたのかい。

え、違うって？

凶鑑のなかに先生が載ってないから、カナシクなったって？

それで泣いていたのかい。おいおい、びっくりさせないでくれよ。そして、先生の話は本当に聞いてなかったんだね。まあ、それはかまわないけど。

そりゃあ、そんな凶鑑に先生なんか載っているわけじゃないか。

何で、って。

存在してないって。いやいや、そういうわけじゃないが。

だからさ、先生はヒトだろ。人類だ。人類はさすがに載っているだろう。だから、たつくさんいる人類のなかの、ごく末端の、一部の、隅っこにいる些細な存在に過ぎないんだよ、先生は。

あれ？ たしかにカナシイね。うん、たしかにカナシイ……。

凶鑑ちゃん。きみは、だから泣いちゃったんだね。たしかにそこには先生もいなければ、凶鑑ちゃんもいない。君のお母さんもお父さんもいない。三浦もいない。世界の凶鑑に載っていない。それは、ある意味で正しいんだ。

誰も自分がここにいることを証明できない。いま目に見えているこの世界が現実で、「在る」ことは、どこまでいっても確かではない。こうして見て、触れていても。

先生にはね、妹がいたんだ。死んじゃったんだけどね。

でも、先生は悲しくなかった。生きていても死んでも、それは確かじゃないという意味で同じだから。だから悲しむのは、泣くのはおかしいと思った。涙が出てくるのは、みんなの手元にハンカチがあるからだ。本当に、心からそう思ったんだ。

誰もがここにいるけれど、誰もそれを確かめられない。それは先生が子供の頃からずっと考えていることのひとつだ。

……けどね、凶鑑ちゃん。

凶鑑ちゃんなんてどこにもいないよ！

なんて言う奴がいたら、先生は、それは嘘だって言い返してあげる。先生は、凶鑑ちゃんがここに「いる」と決めたから。

決めることだけが可能なんだ。だからきつと言い返すよ。

だから、いいね。こわがることはないんだ。

また鼻水でたね、はいチーン。はい、チーン。

最後におもいきり勢いつけて、チーン。

あれ、あの赤い車、きみのお母さんのじゃないか。

戻ってきたんだね。ほら、そうだよ、大きな買い物袋持って……ええ、黄色とピンクのエコバックの。なんか、いいなあ。品があるんだけど、たまにああいう気取りのなさの垣間見える感じが、きみのお母さんだよ。

うれしいかい、そうだね、自慢のお母さんだ。

じゃあ、そろそろ先生帰るよ。遠足の準備だ。しおりができたら、また渡しにくるから。ちょっと疲れたんじゃないかい。あんなに激しくコマネチするからだよ。

待てよ、つまりはぼくのせいかな。なんだか、いけないことを教えちゃったね。

それと、最後にひとつ。

学校に来るのは、ちゃんとからだが治ってから、ね。焦ることはないんだ。お母さんと二人で、ゆっくり治すといい。

布団をかけるよ、手を組んで目を閉じて。こわい夢を見たら、すぐに目覚めるといい。きつとお母さんがそばにいるから。

楽しい夢だったら、なるべく長いあいだ眠っているといい。きみが好きなほうを夢にしていんだよ。それでもお母さんはそばにいるから。

先生？ 先生はもう帰らなきゃいけない。

じゃあ、おやすみ。今日はこれまで。のこりは夢夢。

